

みなとからの風

〒231-8682 横浜市中区新山下3-12-1 / TEL 045-628-6100(代)

<http://www.yokohama.jrc.or.jp/>

●発行：2009年1月 地域医療連携室

Contents

- 新年のご挨拶 1
- みなとトピックス 1~4

- 新任医師のご紹介 3



新年のご挨拶



院長 西岡 清

新年明けましておめでとうございます。医療崩壊で明け暮れた2008年が過ぎ、新しい年とともに医療情勢の好転を期待されていることと存じます。みなと赤十字病院も、新しい年に向かって新たな取り組みを始めようとしております。昨年は、精神科病床・精神科救急をスタートさせ、病院機能の充実を図りましたが、地域の先生方の十分なご期待に応えられない分野も残っており、心苦しく思っております。当院も開院4年が経過し、少しずつ病院としての形態が整いつつあり、また、地域の諸先生との交流も深まりつつあります。地域に根付いた病院を目指して地域連携室の活動も活発になってきております。新年を迎え、さらに病院機能の充実を図るとともに、地域の諸先生との連携を密にした活動を行い、地域住民の期待に応えられる病院を目指して活動したいと考えております。本年もどうぞ宜しくご指導ご鞭撻をお願いします。

みなとトピックス

Topics 耳鼻咽喉科の診療体制

耳鼻咽喉科 医長 生駒 亮

耳鼻咽喉科では、めまい専門の新井部長以外の3人の医師で、手術ならびに一般の外来・入院診療を担当しています。また、担当医師全員が日本耳鼻咽喉科学会認定専門医の資格を有しています。

昨年6月から11月までの半年間の中央手術室での手術件数は151件で、前年同時期より大幅に増加しました。内訳は慢性副鼻腔炎・鼻中隔彎曲症などの鼻・副鼻腔手術が76件、鼓室形成術などの耳科手術が11件、扁桃摘出・アデノイド切除などの咽頭手術が23件、耳下腺・顎下腺・甲状腺などの頸部手術が17件、声帯ポリープなどの喉頭微細手術が14件等でした。

一般に放射線化学療法が第一選択となる喉頭がん・咽頭がんなどの頭頸部悪性腫瘍の進行例は、横浜市大附属病院、同市民総合医療センター、県立がんセンターなどの専門センターに紹介しています。

最近では当院アレルギーセンターの中村センター長・河野副部長と密に連携して、気管支喘息に合併した副鼻腔炎の手術治療を積極的に行い、良好な成績を得ています。再発が多いこの疾患では術後管理が極めて大切で、アレルギー科専門医師による気管支喘息の管理が良好であることも、手術成績の向上に寄与しています。副鼻腔手術を行い上気道の状態を良好にすることにより、下気道疾患である気管支喘息の状態も良くなるといわれています。

またアレルギー性鼻炎に対し、ほぼ無痛で行える超音波メスを用いた局所麻酔下の手術も行っており、良好な成績をあげています。個人差はありますが内服なしでアレルギー症状をかなり軽減させることが可能です。これからの花粉症の季節、毎年悩んでいる方には早めの対処がおすすめです。

詳しくは外来受診時にご相談下さい。

初診担当医 月 交代制(紹介状持参の方のみ)
火 佐藤
水 交代制(紹介状持参の方のみ)
木 生駒
金 入澤

診療時間 9:00~11:00

めまい以外は地域医療連携課にてご予約を承ります。



耳鼻咽喉科病棟スタッフ



内視鏡下副鼻腔手術

呼吸器外科は2005年4月の当院開院と同時に開設されました。扱う疾患は原発性肺癌、転移性肺腫瘍、気胸・嚢胞性肺疾患、縦隔・胸壁腫瘍などと幅広く対応しています。現在常勤1名、非常勤1名ですが、呼吸器科とは毎週合同カンファレンスを行い、密に連携を取りながら診療にあたっております。当院は呼吸器外科専門医合同委員会の関連施設に認定されています。

当科で行っている手術について紹介させていた

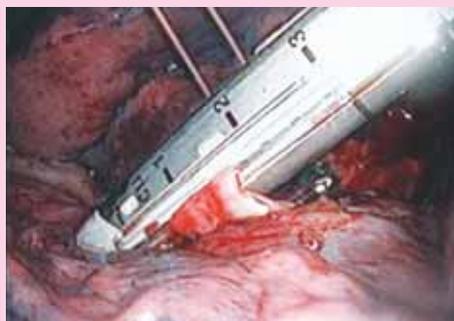
だきます。

原発性肺癌手術は標準術式としての肺葉切除・リンパ節郭清を基本としています。呼吸機能が悪い患者さんや、ステージ期の早期肺癌の患者さんには、術後肺機能の損失が少ない区域切除・部分切除などを選択しています。ステージの進んだ患者さんの場合は開胸手術となりますが、最近は胸腔鏡下肺葉切除術を積極的に行っており、術後早期の回復に努めております。

肺癌 胸腔鏡下肺葉切除術



右下葉肺癌



肺動脈の処理



右下葉切除後

また自然気胸も扱うことの多い疾患です。再発、難治性気胸は手術の適応になりますが、初発でも希望があれば手術を行います。手術はほぼ全例胸腔鏡を用いて行っております。最近では術翌日に胸腔ドレーンを抜去し、術後2日目に退院する

ことがほとんどで、若年の患者さんが早期に社会復帰できるようにしています。また肺表面にPGAシートを貼付して再発の防止につとめています。(症例数などはホームページもご参照ください)

自然気胸 胸腔鏡下肺部分切除術



ブレブの破綻による自然気胸



自動縫合器でブレブを切除



PGAシートを貼付して終了

呼吸器外科では、術前検査は外来や呼吸器科入院中に行い、入院期間は肺癌や転移性肺腫瘍で術後8日前後（胸腔鏡の場合はさらに早期退院も可）、若年者自然気胸で術後2日前後と短くてすむような体制をとっています。また全例にクリニ

カルパスを使用しており、周術期の管理に活用しています。今後も地域医療に貢献できるよう努力して参りますので、よろしくお願い申し上げます。

Topics 精神科における病診・病病連携

精神科 部長 石束 嘉和

(1)精神科以外の科との連携について。
 どのような身体疾患であっても精神症状を合併することは珍しいことではありません。ここでは比較的
 精神科と連携することの多い(a)認知症と(b)うつ病について説明します。

(a)認知症。当科では認知症を対象とした「物忘れ外来」という専門外来を行っています。ここへご紹介いただくのは内科を中心とした診療所からが一番多いです。その流れは図1のようなものです。当科では初診時に医師による問診とともに臨床心理士による簡単な認知機能検査を施行します(図2)。これで認知症かどうかの見込みを立てます。さらにその原因を精査するために頭部MRI検査と甲状腺機能を含む

血液検査などを施行します。次回の受診時にそれらの結果を踏まえて診断をします。脳外科や神経内科受診が必要な場合は当該科に紹介します。幻覚や妄想など認知症の周辺症状と呼ばれる症状があり精神科的治療が必要な場合は引き続き当科に外来通院してもらいます。しかし特に問題となる精神症状がなく認知症の中核症状のみの場合は、ご本人やご家族によく病状を説明しご家族には介護などの注意点を指導し、ドネペジル(アリセプト)の導入をやはり説明してから決めます。ドネペジル導入の有無に関わらず当科的には数ヶ月毎の経過観察になります。その場合は紹介元の診療所にて身体面のフォローと(必要ならば)ドネペジル処方をお願いしています。

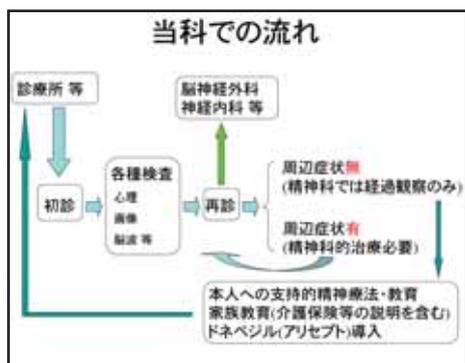


図1 物忘れ病診連携図



図2 認知機能検査風景

(b)うつ病。うつ病は倦怠感、食思不振、不眠などの身体症状を訴えることが多く、うつ病患者さんの多くは内科を初診すると言われています。内科の先生が身体面を精査されても特に異常なくうつ病が疑われる場合は一言「ゆううつですか」と質問してみてください。意外とこの質問がなされていないとの指摘があります。ここで「はい、ゆううつです」との返答があればうつ病の可能性が高くなりますので精神科にご紹介いただくのが良いでしょう。

(2)精神科との連携について。
 同じ精神科同士の場合は(c)診療所と(d)病院で連携の仕方が異なってきます。

(c)診療所の場合。やはりこの場合は診療所での外来通院では対応できず入院治療が必要な状態でのご紹介が圧倒的です。ご連絡いただければ適宜対応しています。

(d)精神科病院の場合。精神科病院入院中の患者さんがその病院では対応できない身体疾患を併発した場合に当院にて心身両面の治療を行います。また当院では修正型電気けいれん療法ができますがこれは麻酔科での身体管理の下で行わなければなりません。精神科病院では施行できないこのような治療を当院に転院して行なうことも可能です。

新任医師のご紹介

新しく就任した医師をご紹介させていただきます。今後地域の先生方と地域医療の連携を推進していきたいと存じますのでどうぞよろしくお願いたします。

*** 質問項目 ***

- ①診療科(専門領域) ②取得認定医 ③卒業大学 ④卒業年度 ⑤趣味 ⑥地域の先生方へ一言!

キムラ ススム
木村 進

- ①産婦人科(全般)
- ②日本産科婦人科学会専門医
- ③東京医科歯科大学
- ④昭和60年
- ⑤英会話
- ⑥「(セミ) オープンシステム」の様な病診連携が出来ないものかと考えています。」

ミヤギ ナオト
宮城 直人

- ①循環器科(虚血性心疾患)
- ②日本心血管インターベンション学会認定医
- ③日本循環器学会専門医
- ④日本内科学会認定医
- ⑤琉球大学
- ⑥平成9年
- ⑦「狭心症、下肢閉塞性動脈硬化症など血管内治療を専門としております。糖尿病患者様などは無症状の方が多く、必要でしたらいつでも御紹介の程よろしくお願ひ申し上げます。」

ヒノ コウヘイ
日野 恒平

- ①精神科
- ③筑波大学
- ④平成16年
- ⑥「よろしくお願ひします。」

Topics ぜんそく死ゼロをめざして

横浜市の政策的医療を担うアレルギーセンターの業務内容は、アレルギー診療、アレルギーに関する教育・啓発、情報発信、疫学調査、臨床研究であり、喘息・アレルギー科を中心とする9診療科各領域のアレルギー専門医とスタッフにより運営されています(写真①)。

今回は、保険医療で扱えない特殊疾患としての「化学物質過敏症(多種化学物質過敏状態)」の診断をめざしたチャレンジブースを紹介しました。今回は、軽症まで含めると日本人の20人に一人が患っている気管支喘息への対策について述べます。気管支喘息は、発作性の呼吸困難、喘鳴、胸苦しさ、咳などの症状を繰り返す慢性疾患ですが、悪性腫瘍性疾患ではないにもかかわらず不十分な教育・指導と自己管理のせいで今でも年間3千人弱の方が発作で亡くなっています。厚生労働省は平成18年度より「喘息死ゼロ作戦」を掲げて、JGL2006等の管理ガイドラインを中心とした取り組みを開始しました。ガイドラインの骨子として重要なのは、吸入ステロイド薬の普及と共に患者の自己管理と急性増悪の予防です。

アレルギーセンターでは喘息の通常診療以外に、自己管理の徹底と環境因子による増悪の予防を目指し、①携帯電話による呼吸機能モニターと②環境中の喘息増悪因子に関する情報提供を実施しています。

中等症以上の喘息患者さんは、ピークフローという呼吸機能を毎朝晩に測定し、それを記載した喘息日誌を受診の度に主治医に見せるのですが、コントロール状況は把握できるものの日々の調子をその日のうちに知らせることはできません。そこで、測定結果をインターネットで、しかも外出中でも使える携帯電話でセンターへ送信(写真②)

アレルギーセンター センター長 中村 陽一

することにより主治医はリアルタイムでその方の状況を知ることができ、増悪時はアドバイスを返信することもできます。この方法を継続することにより喘息管理状況は改善し、患者さんの自己啓発につながることも明らかになりました。

また、このような増悪を引き起こす原因として、室内のダニ・カビ・ペットやウイルス感染が知られていますが、このような自分で予防すべき原因以外に、気温の変化、低気圧、ディーゼル粉塵、黄砂などの屋外環境因子の影響も重要です。アレルギーセンターでは、横浜市内6ヶ所の医療機関等の屋上に気象観測装置、粉塵・花粉数自動計測装置(写真③)を設置することにより、みなと赤十字病院のみならず横浜市内の全ての喘息患者さんの生活圏に近い観測ポイントでの喘息関連環境情報を提供できるネットワークシステムを完成させました。現在、昭和大学横浜市北部病院、県立循環器呼吸器病センター、聖マリアンナ横浜市西部病院、済生会横浜市東部病院のアレルギー・呼吸器専門医と協力してこの取り組みを開始したところです。

このような事業の推進は、医師とコメディカルのみでは不可能であり、遠隔医療ネットワークシステムや環境観測機器のメンテナンス・データサーバーの管理とデータ解析・トラブルへの対応等、当院事務職員、研究補助員、技術指導者、横浜市の関係職員など多くの方の協力で成り立っています。

アレルギーセンターのこのような取り組みが将来的に横浜市の喘息診療レベルの向上と喘息死亡率の低下に結びつくことを信じて疑いません。今後も広く皆様方のご理解をいただきたいと思います。



写真① アレルギーセンター集合写真



写真② 携帯電話による喘息遠隔医療



写真③ 当院屋上の環境観測機器

紹介患者さんのお問い合わせご予約は地域医療連携課

電話 045-628-6365 (直通) / FAX 045-628-6367 (直通FAX)

E-mail : minato-renkei@yokohama.jrc.or.jp